HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域の希少種を対象とした環境教育の再構築 ： 北海道におけるオオムラサキの保護活動を事例に［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	和田, 貴弘
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11952号
Issue Date	2015-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59909
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Takahiro_Wada_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　和　田　貴　弘

審査委員　主査　教　授　池　田　透
副査　教　授　佐　々　木　亨
副査　准教授　笹　岡　正　俊
副査　教　授　矢　部　和　夫（札幌市立大学デザイン学部）

学位論文題名
地域の希少種を対象とした環境教育の再構築
―北海道におけるオオムラサキの保護活動を事例に―

平成２７年５月２９日の課程博士学位申請論文提出を受けて、平成２７年６月１２日に審査委員会を発足した。本論文の内容が、保全生態学の他に、環境教育の分野を含むため、その分野の審査委員を外部から招聘することとし、札幌市立大学デザイン学部の矢部和夫教授に副査としてご参加をいただいた。審査委員会では、平成２７年６月１２日に第１回審査委員会（論文の配付と審査日程の調整)、平成２７年７月２日に第２回審査委員会（論文内容の検討と問題点の整理)、平成２７年７月８日に口頭試問及び第３回審査委員会（口頭試問の内容検討と評価，学位授与の判定)、平成２７年８月３日に第４回審査委員会（審査結果報告書（案）の検討と確認)、平成２７年８月２４日に第 5 回審査委員会（審査結果報告書の確定）を開催して、１回の口頭試問と５回の審査委員会を重ねて論文審査を進めた。

審査委員会では、本論文の当該領域における研究成果を以下のように整理した。

本論文の研究分野である保全生態学と環境教育は、自然環境保全という共通の土俵を持ちながらも、現状では交流が少ない分野である。本論文は、保全生態学と環境教育の融合を目指すという一貫した姿勢で調査研究を行っているが、個々の専門の枠にとらわれた研究には見られない視点が示されており、今後に新しい展開が期待できる研究となっている。

本論文の調査によって明らかになった点として、地域のオオムラサキ保護活動において本種の保護は第一の目的にはなっておらず、地域づくりの論理が優先すること、およびオオムラサキの保護活動は本種の保護に寄与しているものばかりではないことがあげられる。このような希少種保全の現状が地域の実践活動の参与観察を通して具体的に明らかにされたのは初めてであり、地域活性化の名の下に不適切な保全活動が行われている実態を明らかにし、今後の生物保全を対象とした安易な地域活動に警鐘をならすとともに、終章では科学的探求に基づく環境保全活動の方向性を探ることから保全生態学的実践と環境教育の融合に道筋をつけた点は先駆的研究として評価される。また、このようなともすれば独りよがりになりがちで科学的な裏付けが乏しい自然保護活動は、環境教育実践においても教育的な意義をもたらすことができるのだろうかという疑問に対しても高校の環境教育活動を題材として独創的な分析を展開している。

本論文の調査研究は、北海道内で行われてきたが、本州以南のオオムラサキの保護・環境教育活動でも同様の状況であることが想定される。また、本論文でオオムラサキを扱った理由には、本種が日本における保全対象のフラッグシップ種であることも配慮されており、本研究の成果はオオムラサキのみならずホタル等の希少種復元活動全般においても適用可能であり、全国で行われている地域の希少種の保護・教育活動や研究を再考する契機になると考えられる。

以上のような論文成果の整理に基づき、学位授与に関する委員会の所見は以下のようにまとまった。

本研究の成果、特に状況の異なる複数の事例について 10 年という長期にわたる参与観察をもとに、地域活性化に利用される希少種保全活動の問題点を明示し、環境教育と保全生態学的視点の

融合から、今後の地域的生物保全活動に新たな方向性を示した点は高く評価される。
環境教育論的議論におけるデューイ及びケルシェンシュタイナー理論適用の妥当性に詰めの甘さがみられる点や、保全生態学的にはオオムラサキの生命表分析からの考察の必要性といった指摘があったが、オオムラサキの基礎的生態情報自体が不十分な状態において、こうした問題は今後の和田氏の研究の展開の中で情報が蓄積・検討される問題であり、現時点で本研究の意義を損なうものではないと判断された。

以上の経緯から、本審査委員会は、本論文での申請者の研究成果と意義を評価し、全員一致で本論文を博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。